

# グレンコラムキル周遊記

堀 淳 一\*

## 1. 海と泥炭

一車線の、まがりくねった狭い道。

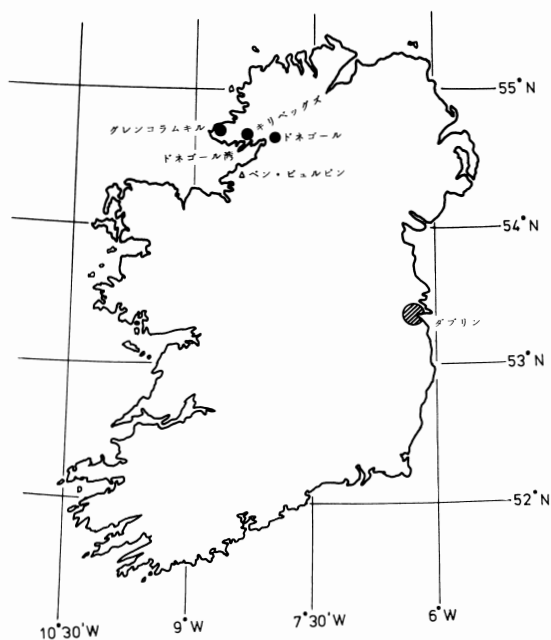
ひなびた家々の建ち並ぶ小さな村落を通りぬけるたびに、ジェームズおじさんは、店先の人や路傍の人に、いちいちハンドルから手を離して、あいさつしてゆく。「うん、このへんの人たちはみんなオレの友達さ、ハハハ」。ある村では道ばたの教会でちょうど結婚式をやっていた。人とクルマで道が埋まっている。村を挙げての結婚式。ここでもジェームズおじさんは一人一人にニコニコとうなずきながら、ゆるりゆるりと雑踏をすりぬけていった。ふだんは人通りも物音もめったにないさいはての村の、ひとときの華やぎ。

そう、そこはアイルランドの西北のさいはてに近い、ドネゴール湾の北岸。湾奥の町ドネゴールを出てから小一時間、クルマはようやくグレンコラムキルまでの半道に来て、唯一の町らしい町、キリベッグズにさしかかるところだった。ジェームズおじさんは気のいいタクシー運転士。

「キリベッグズという名はよく覚えて下さいよ。ここでとれる魚がたくさん日本へ行っているんですよ」と、ジェームズおじさんが言う。なるほど、しばらくして大きな入江の岸に出たかと思うと、やや大きな家々の並び建つ町なみが、続いて巨大な倉庫が眼を圧する港の岸壁が、車窓を流れていった。

しかしそれも、ほんの2、3分のことにすぎず、クルマは忽ち町の西に突き出る半島の尾根を越えて、はろばろとした海原の眺めの中に出た。

それまで走っていたドネゴール湾北岸の東半は、リアス海岸と似た入江に富む海岸で、道は入江の奥の内陸部を結んでいるため、海はほとんど見えなかった。それに対してキリベッグズ以西は、ひだの少ない山地が急斜面で海に臨む出入りの少



地図1 地点図

ない海岸。道はしばらくその急斜面の中腹を走るので、海の眺めが闊然と開けるのである。

といっても、国道はほどなく山の中へ入ってしまう。しかしジェームズおじさんは、親切にも、私が見たのんだわけではないのに、なおしばらく海岸の山腹をゆく枝道のほうを通ってくれたのだ。しかも、枝道に入って5分ぐらい行ったところで、クルマを止めてくれた。

そこはまさに、それに値する、一番見晴らしのよい地点だった。

曇り空からさしてくるにぶい逆光をしみわたるように受けて、まるで大雪原のような白銀を、見わたす限りに延べる海。そのはるかには、左に淡い淡いスモークブルーのベンブルピンの山なみ、左にイニシミュレイのかすかな島影。そのちょうど間には、こちら岸近くのイニシダフという小さな砂州の島が、アッシュグレイのひと刷毛を曳

\* エッセイスト



写真1 地図のA点上での西望

く。

海のこちらは、海へなだれこむ急斜面。逆光にやわらかく輝く明るい黄緑の牧草のじゅうたんが、T字色の光と黒褐色の翳りとをないませる秋枯れの叢を、ボソボソと載せている。道の前方には、うねうねとうねる海蝕崖が、かなたに突き出る岬までえんえんと延びていた。海蝕崖から右手400mの高さまで這い上がる急斜面では、頭上の晴れ間からの日ざしが、牧草を鸚緑に、枯れ叢をガーネットブラウンや明るい樺色に、まだらにひとときやつやかに輝かせている。点々と斜面に載る家々の壁も、まぶしく白かった。冷えびえと吹きわたる海風が、何ともいえずおいしい。

「いいですねえ！ここでクルマを止めて下さってありがとうございます！」

「いえいえ。ほら、あそこに藁葺きの家が一軒あるでしょう。ああいう家をわれわれはコッテイジというんですがね、アイルランドには今もあちこちに残ってるんですよ」

この前アイルランドを歩いたときにも、藁葺きの家は方々で見たが、今ジェームズおじさんの指しているそれは、そのどれよりも美しかった。説明しながら、ジェームズおじさんも、いかにも嬉しそうだ。そしていつのまにか、彼もクルマから出てきて、空気の快よさに眼を細めていたのだった。

クルマが走り始めてからも、なおしばらく、そんな絶景が続いた。珍しく高く盛り上がった山（アイルランドの山のほとんどはのっぺりとなだらかである）が見えてくる。スリーヴ・リーグだ。「あの山の海側はすごい断崖になっているんですよ」と、ジェームズおじさんが言う。「それも見ますか？」見たくないわけがなかったが、あまり道草を食っていると肝心の目的のものを見る時間がなくなりそうだった。道は断崖の前後のけわしい海岸とその手前の深い入江を渡るのを避けて、国道に合してしまふ。断崖を見るためにはまた別の枝道に入り、しかもそれを往復しなくてはならないのだ。で、そのまま枝道を行ってもらおう。

だが、次の枝道にはこちらの希望で入ってもらおう。これはグレンコラムキルまで抜けているし、抜ける手前に巨石墳墓があるはずだったから。

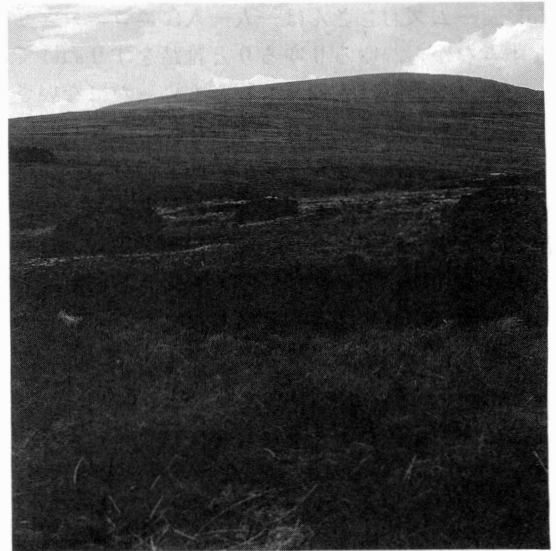


写真2 泥炭の切出し風景

ところが、そこへ着く前に、予想しなかった収穫があった。道の両側に広がる高原がごとごとく泥炭地で、しかも泥炭の切り出しがそこで行われていたのだ。これはしめた!と、クルマを止めてもらおう。ナマナましい切り出しの現場を見るのははじめてだったので。

道の南側は、こちらから見ると丸味を帯びたなだらかな岩石にすぎないスリーヴ・リーグに向かって、ゆるやかに這い上がってゆく泥炭草原。遠くではアッシュローズ、近くでは樺色に染まっ

た、見渡す限りのヒースの荒地だが、道に沿った部分が5~60 cm掘り下げられ、切り取られた泥炭がかたわらの荒地に積み上げられて、泥炭の山の列をつくっているのだった。掘り下げられたところは、新しく生えてきた短い草が藁色をチヨボチヨボと添えているだけの、いちめんの黒褐色。

道の北側では、何と、ごくならかに盛り上がってゆく彼方のスカイラインまで、見えるだけ全部がその黒褐色だった。水田のあぜ道と同じように細く残されているもとの高さの部分が、黒褐色の中にはほんのわずかに緑味を残す藁色の筋を、規則正しく曳いているだけ。スカイラインの上で晴れ上がっている空のブルーとの対照で、それはいいよ、地の底の暗さに見えた。そして、底冷えのするような空気をつめたさ。

## 2. 庭のある巨石墳墓 — マリンモア

クルマは、ヒースのただ中にシルバースカイの冷澄な瞳をポツカリとあけたオーヴァ湖を左に見ながら、マリンモアへと降りてゆく。と、道ばたに、遺跡を指す青い標識。「あつ、これじゃないかな?」と言ったが、ジェームズおじさんは何かほかに心当たりがあるらしく、そのまま降りてゆく。「またもどって来ましょう」と言って。やがて農家が見えてくる。クルマはその前で止まった。

農家から出てきたおばさんとしばらく立ち話をしていたジェームズおじさんは、それがすむと、ニコニコして、私をクルマから誘いだした。

羊の群れをかきわけて、メドウをゆく。草は水だらけ、その下も水びたしで、靴がたちまち中まで濡れてしまう。「今度アイルランドに来るときは長靴をもってきて下さいよ」とジェームズおじさんは笑うが、日本でもこんなことはしょっちゅうやっているから平気。やがて、2 mほどの高さの、1つは白っぽく、1つは黒っぽい灰色の立石スタンディング・ストーンが2本、100 mぐらい離れて立っているのが見えてきた。黒いほうはかたわらに崩れた石の山、白いほうは同じく小さな石の山と、巨石のひと塊りとを従えていた。

巨石の塊りは、もと、いくつかの墓室の連なりで、石の山はそれを覆っていた石積みの塚の名残りらしい。広い草原を伴っているところをみると、おそらく、前庭つき墳墓とよばれるタイプの巨大



写真3 白い立石と巨石墳跡

墳が、そこにあったのであろう。前庭つき、というのは、墓室を覆う塚の前方が両側に二股に張りだして、あたかも前庭のような形の空間を囲むようになっている、という意味だ。しかし、ここのそれは崩れ方がはげしく、二股の部分がほとんど残っていないので、さだかにそうであるとはいえない。

立石がなぜそこにあるのかも、さだかでない。巨石墳と立石が相ともなっていることは、稀らしいから、両者はたぶん無関係で、異なる時代のものなのではなからうか?

黒いほうの立石のかたわらの石の山に至っては、いっそう何だったのかわからない。もう1つの巨石墳墓がそこにあったのか、それともさきの墳墓の前庭をつくっていた石積みの一部の残骸なのだろうか?

首をかしげていたら、ジェームズおじさんにうながされた。「さっきのおばさんがね、今通りすぎてきた遺跡のこともいってましたよ。そっちも見ませんか?」もちろん、2つ返事。

青い標識までもどり、そこから野っ原の小径をたどる。歩きはじめたとたん、にわか風がざわめいてきた。「おつ、来るぞお!」とジェームズおじさんが空を見上げる。つられて見上げると、足早に駆ける灰色の雲が、あっという間に空を暗くしてくる、と思う間に、ザザザー、と横なぐりの

雨が襲ってきた。あわてて傘をさしたが、下半身は濡れっぱなし。セーターをすき通してくる風が寒い。いつも不思議に思う。アイルランドの、ことにアイルランド西部の雨は、どうしていつも、風といっしょにやってくるのだろうか？

だが、風とともにやってくるのは、風とともに忽ち去る。めざす巨石墳に着く頃には、もう風も雨もウソのように収まり、雲がウァーッ、と切れて、日ざしが吹りそそいでいた。ジェームズおじさんと顔を見合わせ、肩をすくめて微笑し合う。

今度は、たしかな庭つき墳墓だった。直径30mぐらいの環状の石積みが、きれいに残っている。幅1mほどの隙間が庭の入口。入口と反対側の3分の1ぐらいが、横に並ぶ巨石の列で仕切られたようになっており、そのうしろには、大きな中央墓室が1つと、これはかなりくずれていてハッキリとは分からないけれど、多分その横に1つずつの副墓室があったと伺わせる石の遺構が認められる。中央墓室の前後にも小さい墓室があったものようだ。そうすると墓室が十字架形に並んでいたわけで、よくあるやつだ。



写真4 庭つき墳墓。中央墓室より庭を見る。

遺跡のまわりは、ゆるやかに波打つ一望の枯れ草原。そのイエローゴールドに対して、石積みで囲まれた前庭の草が、つややかな萌黄色なのはなぜだろう？そういえば、さっき見た2本の立石のまわりの草も、きわだって青々としていた。あそ

こもこも、遺跡だからといって特別に手入れされているとは思えないのに。大昔前庭で行われたらしい祭りあるいは儀式の名残り——ひょっとしたら、そのときに流されたいけにえの血が、今もなお草をいきいきとさせているのだろうか？

そう考えると、にわかに背筋が寒かった。そして、夜なよな墓室から現れて前庭で踊り狂う妖精のまぼろしが、頭の中にゆらめくのだった。

### 3. グレンコラムキルにて

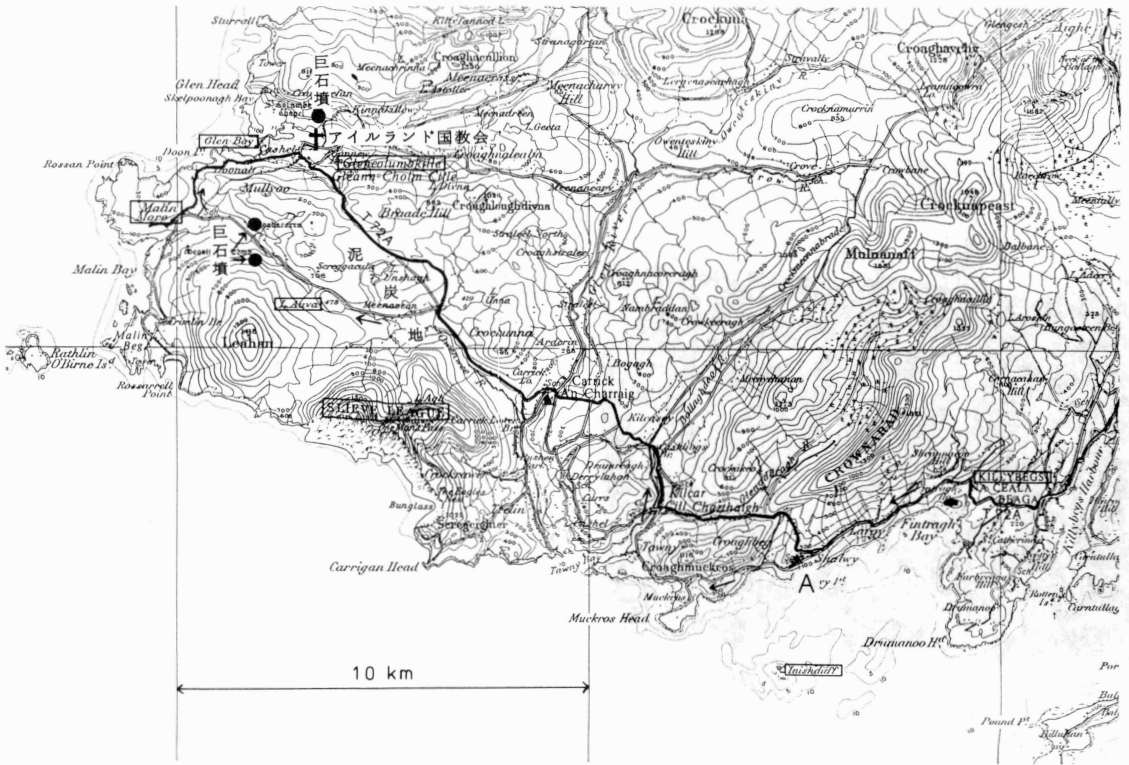
細長いペン皿のような谷が、東から西へしごくゆるやかに下って、グレン湾の浅瀬に溺れている。浅いU字谷。その形と、谷底のモコモコとした起伏とに、谷をつくったのがもっぱら氷だったことが伺われる。

マリンモアから低い峠を越えてやってきた道は、グレン湾頭の民俗村に出、そこからこの谷をさかのぼる。間もなく谷の南壁斜面の上に載るグレンコラムキルの村へ行く道を右へ見送ってすぐ、小さな流れを渡る。燃えるようなオレンジパーミリオンの花が、岸の緑の中に朱を散らしていた。何という名の花だろう？手の切れるほどに冷たそうな清冽な水が、黒灰色の変成岩に嘸きかけている。まだ2時というのに、北緯55度に近い日はもう淡く、立ち止まって流れに見入ると、忽ち冷気が肌にしみてくる。

川の向こうのなだらかに盛り上がる丘の上に、古い教会が見えた。アイルランド国教会だ。道はその丘へ登ってゆく。あっ、あった、あったぞ！石標が！

それは、教会の手前の、道の北側にぬうっと頭をもたげている大きな岩塊の上に立っていた。岩塊に駆け上がって、表も裏も、つくづく眺める。表には正方形の迷路のような紋様がタテに3つ並び、裏には、風化がひどくてよくは分からないが、組み紐あるいは迷路状のパターンが、これも3つほど連なっている。間違いなく、この日最も見たかった石標だった。

意味はわからない。初期キリスト教時代のもの、といわれているだけある。石器時代から前キリスト教時代までの原始的な立石から、はっきりしたキリスト教的意味をもついわゆる高十字架ハイ・クロスへ移ってゆく漸移期の作品なのだろうか。紋様は明らか



地図2 グレンコラムキル周辺(1/126,720地形図より)

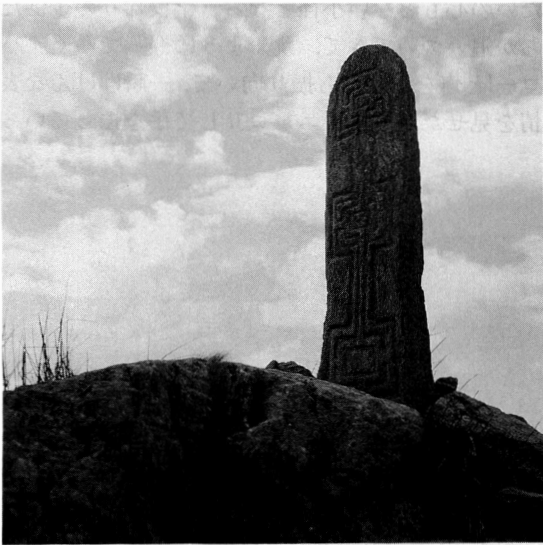


写真5 教会の西の石標

にケルト的なスタイルだが、十字架のイメージがかくし絵的にこめられているようにも見えないことはないのである。

意味のわからないところに、しかし、奇妙な魅力があって、それが私を遠路はるばる、ひき寄せ

たのだ。だから、ひと通り眺めて、写真を撮っても、なお立ち去り難い。ぐるぐるとまわりを何度もめぐる。時折り吹いてくる一陣の風に、飛ばされそうになっても、なお。

丘は、U字谷を流れる二筋の川(さっき渡った川は、その南のほうの一筋だった)にはさまれた小高い盛り上がり。そのため風が強いのだが、眺めも抜群だ。梔子色と鶺色と明るい鸚緑とを織りなす牧草地を敷きつめる両側の谷をへだてて、北には桜鼠と鳩羽紫と弁柄色の岩肌がナマナマしく露出する300mの谷壁、南にはグレンコラムキルの村の家をまばらに載せる谷壁の裾の岩だらけの緩斜面が、えんえんと連なる。雲足の速さを映して、谷壁を、そして谷底を、ほの暗い翳りが走って来ては、走って去る。風とともに、淡く深いわびしさが、谷と空を吹きねけてゆく。

教会は、静寂の中にあった。風だけが、ほわ、ほわ、と耳朵を鳴らす。今しがたチラホラと見えていた、観光客らしい老夫婦の姿も、いつのまにか消えていた。

敷地の中に、「聖コロンバの巡礼所」が2ヶ所あ

る。グレンコラムキル、すなわち「聖コロンバの谷」という名の示す通り、ここはキリスト教初期



写真6 石標よりアイルランド国教会

の聖人聖コロンバが修道院を開いたところ。その彼をまつる6月9日に巡礼者たちが順番にお詣りするがこの巡礼所だ。日本の何々88ヶ所とか、33ヶ所のようなものか。ただしここは数も15ヶ所、と少なく、地域も数キロ四方という狭いもの



写真7 花と教会

だけれども。

教会敷地にあるのは、15ヶ所のうちの最初のも

の1と最後のもの15。1は、すっかり形が崩れ、草の繁るのにまかせた石器時代の庭つき墳墓。15は、真っ2つに折れてしまっはいるが、さきに見たのと同じような石標だった。

教会からさらに東へ進むと、例の青い標識が、丘を左へ降りてゆく道を指している。それにしたがって下り、ついでU字谷の北壁の裾を登る。登りはじめのあたりから、道の両側は荒れ叢となる。逆光に黒々と沈む叢の中でオレンジバーミリオンの花がきらめき、その上から漆黒の教会のシルエットが、光る雲を指していた。そのすぐ先では、何番目かの巡礼所となっているもう1つの石標の大きく傾いた姿と、そのシルエットに教会のシルエットが重なって夕陽に淡く映える南の谷壁のライラックヘイズイから浮かび上がる風景とが、ふたたび足を止めさせた。

小暗い森をしばらくねけたところに、斜面のメドウへ入ってゆくゲートがあった。それが遺跡への入口らしかった。カンヌキをあけて通り、カンヌキを閉めてから進む。エチケットでもあるが、何よりも牛や羊が逃げだしたらコトだからだ。ゲートの向こうはいきなり谷壁急斜面。道も岩づたいの心もとない小径となる。学校帰りの子供たちが追いついてきて、跳ぶように登ってゆく。ハロー!と声をかけたら振り向いて、一瞬げんな表情を見せたが、すぐニコリして手を振っていっ



写真8 ドルメンの1つ



た。真っ白な岩の散らばる鸚緑のメドウを動いてゆく、真っ赤な上衣が可愛い。

5分ほど登ったところが遺跡だった。直径60mほどの環状の石積みの壁（一部バラ線にとって代わられているが）の中に、小さなドルメンが2つ。1つは3つぐらいの墓室がつながっていたものらしい。もう1つも似たようなものだったらしいが、崩れがいちじるしくて、はっきりとわかる墓室は

来た道を、彼が待っている民俗村へと急いだ。



写真9 外のドルメンより環状石積みを望む

1つだけだ。石積みの内部が全部塚だったのか、それとも庭があったのかはわからない。おそらく庭があったと思われるが。

環状の石積みの外にもドルメンらしいものがあったけれども、さらにひどく崩れている上、深い草に埋もれていて、さだかではなかった。

巨石の1つの上に立って、谷壁を、また谷と谷の向こうを、ゆっくりと眺める。風はいつか止み、雲もすっかり散って、さわやかな大気が快よい。牧草の緑と枯れ草の茶との入り乱れる山腹に、あるいは散らばり、あるいは群れる巨石たちが、日ざしの降りそそぐ音にまぎれて、アイルランドの古代史の片鱗を、私に囁きかける。

ふと思った。墓場に棲む妖精たちは、この声の化身なのではないか、と。

気がついたら、ジェームズおじさんと約束した2時間が、もう間もなく過ぎようとしていた。日が沈むまでここにいたい気持ちを押えて、私は今